

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13]

女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善（教）

*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-14]

国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）

Webシラバスに基づく分析から

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-15]

体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果（生,介）

自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13] 女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善 (教)*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

女子大学生は「運動経験」「体育への抵抗感」「健康志向」「仲間との活動志向」などにおいて男子学生とは異なる傾向があり、女子大学生のニーズに即した大学体育授業の再検討は喫緊の課題である。その際、実態調査に基づく実証的な授業改善 (Evidence-Based Education) は、モチベーションや学修成果の向上に資すると考えられる。そこで、本研究では、女子大学生515名を対象に、大学入学時点におけるスポーツ実施状況と大学体育に対する意識の実態を把握し、授業の改善点を探ることを目的とした。調査は、2025年4月にGoogle Formsを用いて実施した。調査項目はスポーツ庁の世論調査を参考にし、意識把握には説明的文章完成法を用いた。その結果、健康であると感じている学生は88.2%に上る一方で、体力に不安を抱く学生が6割以上を占め、87%以上が運動不足を自覚していた。運動頻度は、約6割が週1日以上運動している一方で、4割はそれ未満の頻度にとどまり、運動習慣において二極化が見られた。運動動機は「楽しみ」「健康」「ダイエット」が上位を占めた。観戦・支援活動については経験が少なく、「観る・ささえる」スポーツ文化との接点が弱いことも示された。また、運動やスポーツを大切に好きとする肯定層が半数近くを占めた一方で、価値は認めつつも苦手意識を持つ学生が約3割存在した。最後に、大学体育が「健康・体力」にとどまらず、「自己成長」「人間関係の構築」「情緒的価値」といった多面的な意味で認識されていた。以上から、女子大学生を対象とした大学体育授業においては、運動習慣の再構築を目指すとともに、プレッシャーのない雰囲気づくりと小さな成功体験ができる活動を取り入れることが求められる。また、文化としての運動やスポーツの意味を再認識し、スポーツの多様な活動を経験できるように授業設計を行う必要があることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:20 ~ 9:40

**[学校保健体育-A-14] 国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）
Webシラバスに基づく分析から**

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

〔背景と目的〕高等専門学校（以下、高専）とは、主に16歳から20歳の学生が在籍する高等教育機関であるが、一般的な教科教育という観点から、保健体育の授業も実施されている。高専における保健体育の授業が、どのように展開されているのかは、国立高等専門学校機構が定めた身につけるべき知識や能力の具体的な到達目標であるモデルコアカリキュラム（以下、MCC）に保健体育が位置づけられていないため、その全容を知ることは難しい。これまで、高専の体育授業については、柴山ほか（2022）が全国的な調査からその全容の解明に努めているが、保健授業については同様の研究は見当たらない。そこで、本研究では国立高専の保健授業について、各校が公開しているWebシラバスを基に、その全容を明らかにすることを目的とする。

〔方法〕2025年度Webシラバスから高等学校年代に相当する1～3年次に開講されている保健体育の科目を全て分析対象とした。

〔結果と考察〕①実施科目や時間配当：「保健」という科目を設けて実施している高専は約29%、多くの高専は「保健体育」という科目の中で時間数を限って実施している。また時間配当も1単位程度であり、「保健」の内容を全く実施していない高専も見られた。②カリキュラムや授業内容：健康、生活習慣病、性、喫煙・薬物乱用などのキーワードに関する内容が最も多かった。これらは、高等学校の学習指導要領の領域では「現代社会と健康」に含まれる内容であるが、その他の領域「生涯を通じる健康」、「安全な社会生活」、「健康を支える環境づくり」の内容を盛り込んだシラバスが少ない傾向にあった。MCCに保健体育が位置づけられていないため、「保健」に関する時間配当の少なさや授業内容の偏重といった問題点が明らかになった。一方で、身体不自由者疑似体験等の特徴的な授業も実施されており、高専の特色を生かした保健のあり方も示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:40～10:00

[学校保健体育-A-15] 体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果 (生,介)

自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

【研究の背景】日本は地震、台風、豪雨、大雪など、多様な自然災害のリスクに常にさらされている。このような状況に対処するためには、科学的かつ合理的な防災・減災対策を習得することが不可欠である。特に体育・スポーツを学ぶ学生は、その身体性や集団的特徴から、自らや身近な人々だけでなく、社会的により弱い立場の者を助ける心性を備え、それを実践可能とする最低限の身体能力・技能を有することが求められる。さらに近年、防災・減災力を高める学習方法として、アウトドアアクティビティが注目されている。その中でも、防災キャンプは、被災時の生活に役立つ体験的な学びを得る手段として考えられた教育手法であり、文部科学省もその推進を図っている。

【目的】本研究は、体育系大学生を対象とした体験型防災キャンプが防災意識に及ぼす教育的効果を検討することを目的とした。

【方法】対象はK大学体育学科に所属する学生16名であり、自衛隊駐屯地において実施された2日間の防災キャンプに参加した。プログラム内容は、応急救護、天幕設営、行進訓練等の実践的活動で構成された。防災意識の変容を測定するために、防災意識尺度を用いて事前・事後の意識調査を実施し、さらに自由記述を含むアンケート調査を行った。

【結果】防災意識尺度の分析により、「被災状況の想像力」および「他者指向性」において有意な向上が認められた($p<0.05$)。また、アンケート結果では、参加者の95%以上が本プログラムに対して「満足」と回答し、特に応急救護訓練に関しては全員が「有益であった」と評価した。

【考察】これらの結果より、実践的活動を中心とした体験型防災学習が大学生の防災意識の向上に有効であることが示唆された。今後は、防災意識の向上を具体的な行動力へとつなげるための教育プログラムの構築と、地域や関係機関との連携による継続的な防災教育の展開が課題である。